

オメル・セイフェッティン短編選集

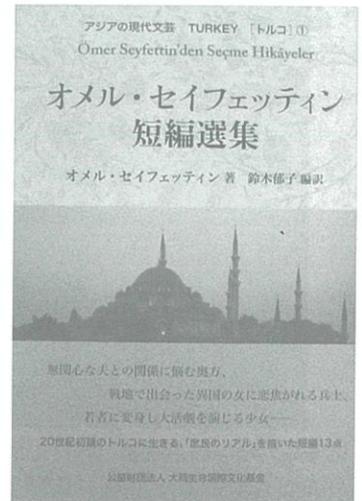
トルコ文学研究・翻訳(編訳者) 鈴木 郁子

大同生命国際文化基金の翻訳出版プロジェクト「アジアの現代文芸」より2020年11月、『オメル・セイフェッティン短編選集』が上梓されました。オメル・セイフェッティンは、トルコ文学に関わる人間にとって翻訳されてしかるべき作家であり、この度の書籍化には、なすべきことがなされた、という思いでいます。

オメル・セイフェッティン(1884～1920)はトルコの作家、軍人、教師です。主に短編小説を得意としました。彼の生涯や文学活動については、本書の「解説」に詳しく記しましたのでくり返しは避けませんが、トルコ文学界の言文一致運動「Yeni Lisan (イェニ・リサン/新言語運動)」をけん引し、トルコ語の純粹化に大きな役割を果たした、という点は強調しておきたいと思えます。

オメル・セイフェッティンの作品を読んで感じるのは、非常に現代的である、ということです。今回、翻訳にあたり13の短編を選びましたが、ナスレットイン・ホジャ風あり、私小説も、心理戦を描く人間ドラマも、社会派風もあり、いずれも2021年になっても古びた感じはせず、むしろ現代作家の作品を読むように自然です。それぞれ趣向の異なる作品で、作者の持つ世界の広さと深さが感じられます。一人の作家の作品でありながら、次々と別の扉を開くようでもあります。また、リアリストの冷徹で意地悪ともいえる観察眼によって20世紀初頭のトルコの庶民を描き出していますが、適度なユーモアと歯切れのいい文章で、決して陰鬱、陰惨にはなりません。むしろ、いずれの時代も人の考えることはあまり変わらない、と納得させられます。

オメル・セイフェッティンを中心とした、新



言語運動を推し進めた若手文学者たちは、日常の話し言葉を文学に押し上げる、というよりは、日常の口語を用いて、トルコ文学をさらに発展させるという視点に立っていたといえるでしょう。彼らには、「トルコ語」という当時の庶民が使っていた言葉が民族の言語として重要である、という出発点があったためです。この点も「解説」に記しました。

日本でも、明治維新後に言文一致運動が行われたことは誰もが知るところです。20世紀初頭、日本での運動とほぼ同時期に、トルコの言文一致運動が行われました。アジアの東端と西端で列強各国に押されるようにして動き出した、文学界における大きな改革、そのトルコ側の旗手を務めたのがオメル・セイフェッティンです。

本書は各公共図書館にて貸し出しもありますし、下記アドレスより無料で電子書籍版をダウンロードできます。ぜひ、この機会に短編の名手オメル・セイフェッティンの世界を味わってみてください。

最後に、上梓を実現させた大同生命の皆さまの熱意と、編集部をはじめ、翻訳作業中にお世話になった皆さまへ改めて御礼申し上げます。

*本書は下記よりダウンロードできます。
<http://www.daido-life-fd.or.jp/business/publication/publish/turkey/turkey1.html>